

# 男性・女性・中性の有標性と性の体系

行重 耕平

## 1. はじめに

行重 (2014) において、ドイツ語における形容詞の弱変化語尾 “-e/-en” 及び 指示／関係代名詞の拡張語尾 “-en” の分布について、性・数・格に関する有標性 (markedness) の観点から最適性理論 (Optimality Theory) による説明を試みた。形容詞の弱変化語尾に関しては、現代ドイツ語だけでなく中高ドイツ語の分析も行ったが、性数格の有標性は普遍的であると仮定し、性に関しては、男性>女性>中性の順に有標性が高くなるという階層性を前提とした。

ドイツ語は印欧語で元来区別されていた男性・女性・中性の3性を現代まで保持している言語の1つであるが、現代ドイツ語ではこの3性の区別は単数においてのみで、複数においては性の区別が消失する。一方、中高ドイツ語では単数で3性が区別されるのは現代ドイツ語と同じであるが、複数においては男性と女性が統合されるとどまり中性は維持される。ところが、男性>女性>中性の有標性階層を前提とすると、現代ドイツ語のような性体系の存在は容易に予測できるが、中高ドイツ語のような体系の存在は単純には予測できない。性の有標性階層だけでは、中性を維持したままでそれよりも有標性の低い性が統合の対象になることはないことになってしまうのである。

本論は、上の階層性を前提としつつ、男性・女性・中性の3性を基本とする言語についてその性体系をどのように捉えればよいかを考察するものである。

## 2. 有標性制約と忠実性制約

最適性理論 (Optimality Theory) (Prince & Smolensky 1993, Kager 1999, McCarthy 2008, その他) においては、有標性階層は優先順位を持った有標性制約 (markedness constraint) として捉えることができる。

### (1)

\*neuter >> \*feminine >> \*masculine

これらは、それぞれの性の実現を禁止するもので、その禁止度合いが最も高いのが中性であるということになる。

これに対し、指定された値の保持を要求する忠実性制約 (faithfulness constraint) が存在し、これが有標性制約に優先することによって禁止された値が実現するのである。指定された性を保持する忠実性制約をとりあえず FAITH<sub>gender</sub> とし、これを (1) のすべての有標性制約に優先させると、3つの性すべてが実現することになる。

(2)

FAITH<sub>gender</sub> >> \*neuter >> \*feminine >> \*masculine

(3)

/masculine/	FAITH <sub>gender</sub>	*neuter	*feminine	*masculine
a. ♂ [masculine]				*
b. [feminine]	*!		*	
c. [neuter]	*!	*		
/feminine/				
a. [masculine]	*!			*
b. ♂ [feminine]			*	
c. [neuter]	*!	*		
/neuter/				
a. [masculine]	*!			*
b. [feminine]	*!		*	
c. ♂ [neuter]		*		

FAITH<sub>gender</sub> を \*neuter と \*feminine の間に配置すると、何らかの性が必ず実現するという前提であるが、中性は、男性に統合されることで実質存在しないことになる。

(4)

\*neuter >> FAITH<sub>gender</sub> >> \*feminine >> \*masculine

(5)

/masculine/	*neuter	FAITH <sub>gender</sub>	*feminine	*masculine
a. ♂ [masculine]				*
b. [feminine]		*!	*	
c. [neuter]	*!	*		
/feminine/				
a. [masculine]		*!		*
b. ♂ [feminine]			*	
c. [neuter]	*!	*		
/neuter/				
a. ♂ [masculine]		*		*
b. [feminine]		*	*!	
c. [neuter]	*!			

これが正にロマンス諸語の状況であると考えられ、元になったラテン語の中性名詞の多くが男性名詞になったという通時的事実とも合致する(島岡 1986: 18)。<sup>1)</sup>

FAITH<sub>gender</sub> を \*feminine と \*masculine の間に配置すると、男性のみが存在することになるが、性は2つ以上存在することで意味を持つので、この場合は実質上性は存在しないことにな

ると考えられる。

(6)

\*neuter >> \*feminine >> FAITH<sub>gender</sub> >> \*masculine

(7)

/masculine/	*neuter	*feminine	FAITH <sub>gender</sub>	*masculine
a. $\mathcal{G}$ [masculine]				*
b. [feminine]		*!	*	
c. [neuter]	*!		*	
/feminine/				
a. $\mathcal{G}$ [masculine]			*	*
b. [feminine]		*!		
c. [neuter]	*!		*	
/neuter/				
a. $\mathcal{G}$ [masculine]			*	*
b. [feminine]		*!	*	
c. [neuter]	*!			

あるいは、何らかの性が必ず実現するという前提を外せば、FAITH<sub>gender</sub>を最下位に配置することで、文字通り性の全く存在しない体系を導くこともできる。

(8)

\*neuter >> \*feminine >> \*masculine >> FAITH<sub>gender</sub>

(9)

/masculine/	*neuter	*feminine	*masculine	FAITH <sub>gender</sub>
a. [masculine]			*!	
b. [feminine]		*!		*
c. [neuter]	*!			*
d. $\mathcal{G}$ [ ]				*
/feminine/				
a. [masculine]			*!	*
b. [feminine]		*!		
c. [neuter]	*!			*
d. $\mathcal{G}$ [ ]				*
/neuter/				
a. [masculine]			*!	*
b. [feminine]		*!		*
c. [neuter]	*!			
d. $\mathcal{G}$ [ ]				*

現代ドイツ語では、単数においては3性が区別されるが、複数においては性の区別が消失する。つまり、単数では(2)が成り立ち、複数では(6)または(8)が成り立っていることになる。この数による相違も有標性に基づいており、次のような有標性制約が存在するものと考えられる。

(10)

\*plural >> \*singular (\*pl >> \*sg)

この数の有標性制約は、性のそれ(11)と局所結合(Local Conjunction)(Smolensky 1993: 8, 1995: 4, Kager 1999: 392ff., その他)によって結び付き、新たな制約と優先順位を形成すると考えることができる。

(11) (= (1))

\*neuter >> \*feminine >> \*masculine

(12)

a. \*masculine & \*pl >> \*masculine & \*sg

b. \*feminine & \*pl >> \*feminine & \*sg

c. \*neuter & \*pl >> \*neuter & \*sg

(13)

a. \*neuter & \*pl >> \*feminine & \*pl >> \*masculine & \*pl

b. \*neuter & \*sg >> \*feminine & \*sg >> \*masculine & \*sg

性が同じであれば、全体としての有標性は複数においての方がより高くなることは容易に理解できるであろう。数が同じであれば、(11)の階層性は同様に成り立つことになる。

以上のことから、現代ドイツ語では、次のような制約と優先順位が成り立っていると考えられ、(14)aが(2)に、(14)bが(6)または(8)に相当することになる。

(14)

a. FAITH<sub>gender</sub> >> \*neuter & \*sg >> \*feminine & \*sg >> \*masculine & \*sg

b. \*neuter & \*pl >> \*feminine & \*pl >> FAITH<sub>gender</sub> >> \*masculine & \*pl

または、  
\*neuter & \*pl >> \*feminine & \*pl >> \*masculine & \*pl >> FAITH<sub>gender</sub>

複数においては、FAITH<sub>gender</sub>の立場が相対的に弱まることになるが、(12)から、複数よりも単数においてFAITH<sub>gender</sub>の立場が弱まるという逆のパターンはありえないことになる。すなわち、複数における方が単数におけるよりも多くの性を区別することはありえないとい

うことで、これは Greenberg(1966: 95) の *Universal 37* に合致する。

さて、ロマンス諸語や現代ドイツ語の性体系を捉えるためには上で見た分析は有効であるが、中期高地ドイツ語（中高ドイツ語）(Mittelhochdeutsch) の複数において、男性と女性統合し、中性が保持されるという体系を把握することはできない。性の階層性に普遍性はなく、女性と中性の順位を入れ替えることができればよいのであるが、行重(2014)において見たように、形容詞の弱変化語尾“-e/-en”の分布を説明するためにはそのような順位の入替えは不可能である。しかし、男性と女性が統合していわゆる通性 (common gender) を形成し中性と対峙する構図は北欧語に見られ、特に珍しいものではない。<sup>2)</sup> それで、この節で大まかに設定した忠実性制約を明確化かつ細分化し、さらなる検討を行う必要がある。

### 3. 忠実性制約の細分化と性の指定

前節で見たように、性の有標性階層を前提とする限り、ただ1つの忠実性制約で実際に観察されるパターンを把握するのは困難である。そこでまず、次の3つの忠実性制約を設定することとする。

(15)

MAX<sub>gender</sub> 「性の指定は何らかの性として実現しなければならない」

(16)

MAX<sub>neuter</sub> 「中性の指定は実現しなければならない」

(17)

MAX<sub>feminine</sub> 「女性の指定は実現しなければならない」

(15) の MAX<sub>gender</sub> と (16), (17) の MAX<sub>neuter</sub> 及び MAX<sub>feminine</sub> とは、その性質がやや異なっている。MAX<sub>gender</sub> は、性が指定されている場合にはたとえ元の性を変更してでも性の実現を要求するもので、中性と指定されたものを女性として実現させてもこの制約は守られたことになる。何らかの性が指定されているにもかかわらず性を実現していない場合に初めて違反となる。一方 MAX<sub>neuter</sub> は、中性と指定されているものを中性として実現することを要求するもので、中性の指定にもかかわらず他の性を実現したりあるいは性を全く実現しなければ違反となる。MAX<sub>feminine</sub> は、MAX<sub>neuter</sub> の女性版である。これらの MAX 制約に関わる “gender” と “neuter” / “feminine” は、それぞれ音韻論における分節 (segment) と自律分節 (autosegment) (McCarthy 2008: 200) に相当するものと考えることができる。

ここで注意しなければならないのは、忠実性制約を細分化することでより多くの現象を把握することが可能となるが、その分ありえないパターンまで予測してしまう危険性も増

大するということである。上のように設定された忠実性制約は有標性階層の機能を無効にしてしまう能力を有している。しかし、通性と中性の対立は性の有標性階層と矛盾するような現象であるため、このような忠実性制約も存在すると考えざるを得ない。ただ、安易に忠実性制約を細分化することは慎むべきであろう。

次に、前節とは異なり、性の指定に関して男性は無指定であると考えることとする。前節では、性の区別が存在しない場合を、男性の指定のみが存在しているとも、そもそも性そのものが存在しないとも解釈できることを見た。性に関して無指定であることが自動的に男性であると解釈されれば、このような曖昧性を避けることができる。また、MAX<sub>neuter</sub> や MAX<sub>feminine</sub> の存在は、性の指定を有しているものとそうでないものとの両方を含んだ体系を許容する。もし性の指定を有しているものに関してのみ性が認識されたとすると、性のある名詞句とそうでない名詞句とが並存する体系も存在することになり、これは事実と反する (Corbett 1991: 203ff.)。

(18)

- a. 男性 = [         ]
- b. 女性 = [feminine]
- c. 中性 = [neuter]

男性が性に関して無指定であるとする、有標性制約 \*masculine は存在しないことになる。

(19)

\*neuter >> \*feminine

以上の考察を中高ドイツ語に適用すると、(20) のような優先順位を設定することができる。<sup>3)</sup> ここでは MAX<sub>feminine</sub> を表示していないが、これを MAX<sub>gender</sub> の代わりに用いても同じ効果を得ることができる。

(20)

- a. MAX<sub>neuter</sub> >> \*neuter & \*sg, MAX<sub>gender</sub> >> \*feminine & \*sg
- b. MAX<sub>neuter</sub> >> \*neuter & \*pl >> \*feminine & \*pl >> MAX<sub>gender</sub>

(21)

a.

/	/(sg.)	MAX <sub>neuter</sub>	*neuter & *sg	MAX <sub>gender</sub>	*feminine & *sg
a.	[ ]				
b.	[feminine]				*!
c.	[neuter]		*!		
	/feminine/(sg.)				
a.	[ ]			*!	
b.	[feminine]				*
c.	[neuter]		*!		
	/neuter/(sg.)				
a.	[ ]	*!		*	
b.	[feminine]	*!			*
c.	[neuter]		*		

b.

/	/(pl.)	MAX <sub>neuter</sub>	*neuter & *pl	*feminine & *pl	MAX <sub>gender</sub>
a.	[ ]				
b.	[feminine]			*!	
c.	[neuter]		*!		
	/feminine/(pl.)				
a.	[ ]				*
b.	[feminine]			*!	
c.	[neuter]		*!		
	/neuter/(pl.)				
a.	[ ]	*!			*
b.	[feminine]	*!		*	
c.	[neuter]		*		

(21)b から分かるように、男性と女性の統合は、女性の指定を持ったものがその指定を失って男性となることとして捉えられる。性の統合によって通性のような新たな範疇が形成されると考えるより、一方の性がもう一方のそれに吸収されると考えた方が合理的である。そして有標性階層によって、体系から消失するのはより有標的な性となる。

以上で、懸案であった中高ドイツ語の性体系を把握することが可能となった。それで次に、現代ドイツ語をこの節の新たな枠組みでもう一度見てみる。単数においては中高ドイツ語と同じであるが、複数においては性の区別がなくなる。中高ドイツ語との違いは、女性の実現を禁止する有標性制約だけではなく、中性のそれも有効になることである。

(22)

\*neuter & \*pl >> MAX<sub>neuter</sub>, \*feminine & \*pl >> MAX<sub>gender</sub>(MAX<sub>feminine</sub>)

(23)

/	/(pl.)	*neuter & *pl	MAX <sub>neuter</sub>	*feminine & *pl	MAX <sub>gender</sub>
a.	[ ]				
b.	[feminine]			*!	
c.	[neuter]	*!			
	/feminine/(pl.)				
a.	[ ]				*
b.	[feminine]			*!	
c.	[neuter]	*!			
	/neuter/(pl.)				
a.	[ ]		*		*
b.	[feminine]		*	*!	
c.	[neuter]	*!			

最後にもう1つ、中高ドイツ語とも現代ドイツ語とも異なるスロベニア語のパターン (Corbett 1991: 157) も見ておくこととする。スロベニア語には、単数と複数に加え双数 (dual) が存在し、単数と複数においては男性・女性・中性の3性が区別されるが、双数では女性と中性が統合される。双数は複数よりもさらに有標性が高いと考えられ、数に関して次のような順位の有標性制約を設定することができる。

(24)

\*dual >> \*plural >> \*singular (\*du >> \*pl >> \*sg)

忠実性制約に対する有標性制約の相対的位置は、単数と複数においてはドイツ語における単数の場合と同じである。双数においては、中性を禁止する制約は有効となるが、女性を禁止する制約は無効のままとなる。

(25)

\*neuter & \*du >> MAX<sub>neuter</sub>, MAX<sub>gender</sub> >> \*feminine & \*du

(26)

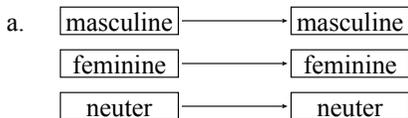
/	/(du.)	*neuter & *du	MAX <sub>neuter</sub>	MAX <sub>gender</sub>	*feminine & *du
a. ☞	[ ]				
b.	[feminine]				*!
c.	[neuter]	*!			
/feminine/(du.)					
a.	[ ]			*!	
b. ☞	[feminine]				*
c.	[neuter]	*!			
/neuter/(du.)					
a.	[ ]		*	*!	
b. ☞	[feminine]		*		*
c.	[neuter]	*!			

なお、ここでは、MAX<sub>gender</sub> を MAX<sub>feminine</sub> で置き換えることはできない。さらに MAX<sub>feminine</sub> は、(25) のどの位置に割り当てても結果に影響を与えることはなく、実質意味を持たない。

#### 4. 3性に基づいた類型

男性・女性・中性の3性を基本とした場合、考えられるパターンは、これらすべてが実現するかあるいは全く実現しないか、男性と女性が統合するか、男性と中性が統合するか、女性と中性が統合するかの5通りである。性が統合する場合、有標性のより低い性に吸収されると考えると、それぞれのパターンを、前節で設定した制約に基づいて、以下のように捉えることができる。

(27)

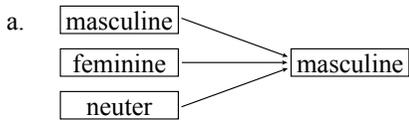


b. MAX<sub>neuter</sub> >> \*neuter, MAX<sub>gender</sub>(MAX<sub>feminine</sub>) >> \*feminine

c.

/	/	MAX <sub>neuter</sub>	*neuter	MAX <sub>gender</sub>	*feminine
a. ☞	[ ]				
b.	[feminine]				*!
c.	[neuter]		*!		
/feminine/					
a.	[ ]			*!	
b. ☞	[feminine]				*
c.	[neuter]		*!		
/neuter/					
a.	[ ]	*!		*	
b.	[feminine]	*!			*
c. ☞	[neuter]		*		

(28)

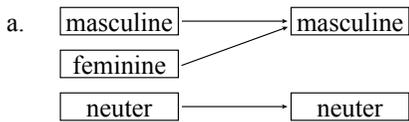


b. \*neuter >> MAX<sub>neuter</sub>, \*feminine >> MAX<sub>gender</sub>(MAX<sub>feminine</sub>)

c.

/ /	*neuter	MAX <sub>neuter</sub>	*feminine	MAX <sub>gender</sub>
a. $\mathcal{G}$ [ ]				
b. [feminine]			*!	
c. [neuter]	*!			
/feminine/				
a. $\mathcal{G}$ [ ]				*
b. [feminine]			*!	
c. [neuter]	*!			
/neuter/				
a. $\mathcal{G}$ [ ]		*		*
b. [feminine]		*	*!	
c. [neuter]	*!			

(29)

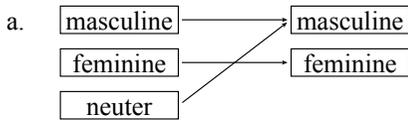


b. MAX<sub>neuter</sub> >> \*neuter >> \*feminine >> MAX<sub>gender</sub>(MAX<sub>feminine</sub>)

c.

/ /	MAX <sub>neuter</sub>	*neuter	*feminine	MAX <sub>gender</sub>
a. $\mathcal{G}$ [ ]				
b. [feminine]			*!	
c. [neuter]		*!		
/feminine/				
a. $\mathcal{G}$ [ ]				*
b. [feminine]			*!	
c. [neuter]		*!		
/neuter/				
a. [ ]	*!			*
b. [feminine]	*!		*	
c. $\mathcal{G}$ [neuter]		*		

(30)

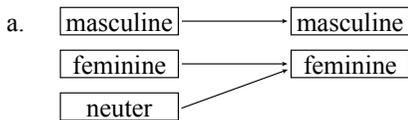


b. \*neuter >> MAX<sub>neuter</sub>, MAX<sub>feminine</sub> >> \*feminine >> MAX<sub>gender</sub>

c.

/ /	*neuter	MAX <sub>neuter</sub>	MAX <sub>feminine</sub>	*feminine	MAX <sub>gender</sub>
a.  [ ]					
b. [feminine]				*!	
c. [neuter]	*!				
/feminine/					
a. [ ]			*!		*
b.  [feminine]				*	
c. [neuter]	*!		*		
/neuter/					
a.  [ ]		*			*
b. [feminine]		*		*!	
c. [neuter]	*!				

(31)



b. \*neuter >> MAX<sub>neuter</sub>, MAX<sub>gender</sub> >> \*feminine

c.

/ /	*neuter	MAX <sub>neuter</sub>	MAX <sub>gender</sub>	*feminine
a.  [ ]				
b. [feminine]				*!
c. [neuter]	*!			
/feminine/				
a. [ ]			*!	
b.  [feminine]				*
c. [neuter]	*!			
/neuter/				
a. [ ]		*	*!	
b.  [feminine]		*		*
c. [neuter]	*!			

(28) は、すべての性が男性に収斂する形になっているが、男性しか存在しないということは、性の区別がない、すなわち性は存在しないということである。そもそも男性は性の指定をもたないというのが本論の立場である。

(27) ~ (29) では、 $MAX_{gender}$  と  $MAX_{feminine}$  の機能は実質同等である。ここでは \*feminine との関連が問題となっており、この有標性制約を無効にするためには、 $MAX_{gender}$  と  $MAX_{feminine}$  のうちどちらか1つが上位に位置すればよい。一方、\*feminine を有効にするためには、 $MAX_{gender}$  と  $MAX_{feminine}$  の両方が下位に位置しなければならない。

(31) では、 $MAX_{feminine}$  はその機能を果たす機会がなく、どの位置にあっても同じ結果となる。

ところで、上のパターンを通時的に解釈し、時間の経過に伴う性の統合を表したものであるとすると、(30) は、先に見たラテン語からロマンス諸語への変遷に相当する。Matasović(2004: 74ff.) には、印欧諸語について、(27) ~ (30) に相当する通時的変遷パターンが示されているが、もう1つの可能性である女性と中性が統合するパターン (31) は示されていない。

次に、上のパターンを共時的に捉え、数の有標性に基づいた一言語内の性の統合を表したものであるとすると、前節で見た現代ドイツ語は (28) に、中高ドイツ語は (29) に、スロベニア語は (31) にそれぞれ相当することになる。ロマンス諸語の起源であるラテン語は (27) のパターンを示す。Corbett(1991: 152ff., 189ff.) は、印欧語以外で3つより多くの性を持つ言語も含めて、数と性の相関パターンをいろいろと示している。しかし、この中に (30) のような中性と男性が統合するパターンは含まれていない。

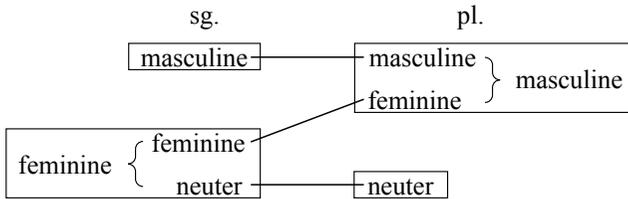
Matasović と Corbett のデータだけから断定はできないが、中性と男性が統合するパターン (30) は通時的な、女性と中性が統合するパターン (31) は共時的な状況でのみ起こり得る現象なのかも知れない。ここで忠実性制約  $MAX_{gender}$  と  $MAX_{feminine}$  を見てみると、上記5つのパターンのうちの3つ (27) ~ (29) においては、その機能が実質同等であり、これら2つの制約の並存は余剰的である。これに対し、通時的か共時的かによってその存在が左右されるように思われる (30) と (31) においては、 $MAX_{gender}$  と  $MAX_{feminine}$  を同等に扱うことができない。つまり、存在が限定的なパターン (30) / (31) は、そうでないパターン (27) ~ (29) に比べ、忠実性制約をより限定的に用いているということになるのである。純粹にパターンを把握するためには設定された制約の特徴が現実世界に反映されているとすれば、それは非常に興味深いことである。

## 5. その他の体系

数と性との相関パターンに関して、前節までは無標的な数における3性の区別が、有標的な数において減少する例を見てきた。この節では、3性を基準としながらも、前節までとは異なったパターンを示す言語を Corbett(1991) より2つ取り上げる。

1つ目は、ドラビダ語族のテルグ語で、単数においては女性と中性が統合し、複数においては女性と男性が統合する (Corbett 1991: 153, 202)。

(32)



単数では前節の (31) が、複数では (29) が成り立っていると考えられるので、それぞれの数について個別に制約の優先順位を考えると、次のようになる。

(33)

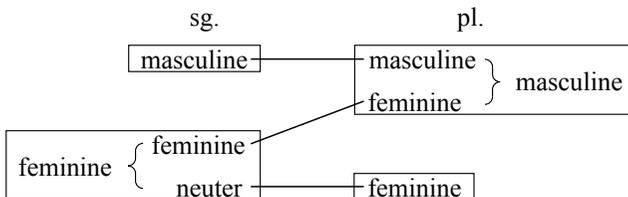
- a. \*neuter & \*sg >> MAX<sub>neuter</sub>, MAX<sub>gender</sub> >> \*feminine & \*sg
- b. MAX<sub>neuter</sub> >> \*neuter & \*pl >> \*feminine & \*pl >> MAX<sub>gender</sub>

しかし、\*neuter & \*sg >> \*neuter & \*pl 及び \*feminine & \*pl >> \*feminine & \*sg となり、前者は数の有標性と矛盾することになってしまう。

ドラビダ系の言語における性は、印欧語と異なり意味との相関が明瞭であり、無生物を示す名詞が男性や女性に分類されることはほとんどない (Corbett 1991: 8ff.)。そのため、この種の体系は何らかの意味的要因によるもので、(性に関する) 有標性の問題ではないとも考えられる。しかし、テルグ語のパターンも敢えて性の有標性に基づいて捉える試みを行うこととする。

まず、(32) のパターンを解釈し直し、複数における中性は実は女性であると考えようにする。つまり、女性の指定を持ったものは、単数においてはそのまま女性として、複数においては男性として実現するのに対し、中性の指定を持ったものは、単数においても複数においても女性として実現するということである。<sup>4)</sup>

(34)



感覚的には奇異に見えるかも知れないが、理論的には可能な体系である。

次に、MAX<sub>neuter</sub> と MAX<sub>gender</sub> を結合した制約 MAX<sub>neuter</sub> & MAX<sub>gender</sub> を設定し、これを最上位に配置する。

(35)

- a. MAX<sub>neuter</sub> & MAX<sub>gender</sub> >> \*neuter & \*sg >> MAX<sub>neuter</sub> >> MAX<sub>gender</sub> >> \*feminine & \*sg
- b. MAX<sub>neuter</sub> & MAX<sub>gender</sub> >> \*neuter & \*pl >> MAX<sub>neuter</sub>, \*feminine & \*pl >> MAX<sub>gender</sub>

こうすることで、数の有標性と矛盾しない形で (34) のパターンを導き出すことができる。

(36)

a.

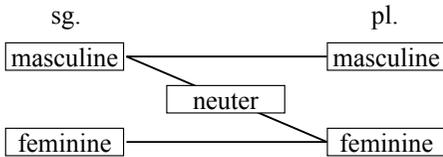
/	/(sg.)	MAX <sub>neuter</sub> & MAX <sub>gender</sub>	*neuter & *sg	MAX <sub>neuter</sub>	MAX <sub>gender</sub>	*feminine & *sg
a. $\varnothing$ [ ]						
b. [feminine]						*!
c. [neuter]			*!			
/feminine/(sg.)						
a. [ ]					*!	
b. $\varnothing$ [feminine]						*
c. [neuter]			*!			
/neuter/(sg.)						
a. [ ]		*!		*	*	
b. $\varnothing$ [feminine]				*		*
c. [neuter]			*!			

b.

/	/(pl.)	MAX <sub>neuter</sub> & MAX <sub>gender</sub>	*neuter & *pl	MAX <sub>neuter</sub>	*feminine & *pl	MAX <sub>gender</sub>
a. $\varnothing$ [ ]						
b. [feminine]					*!	
c. [neuter]			*!			
/feminine/(pl.)						
a. $\varnothing$ [ ]						*
b. [feminine]					*!	
c. [neuter]			*!			
/neuter/(pl.)						
a. [ ]		*!		*		*
b. $\varnothing$ [feminine]				*	*	
c. [neuter]			*!			

もう1つのパターンは、印欧語の1つルーマニア語で、ロマンス語としては珍しく中性を保持している。ただ、ルーマニア語の中性は単数では男性と、複数では女性と統合する (Corbett 1991: 150ff.)。

(37)



それで、単数においては (30) の、複数においては (31) のパターンが成り立っていることになる。

(38)

- a. sg.: \*neuter >> MAX<sub>neuter</sub>, MAX<sub>feminine</sub> >> \*feminine >> MAX<sub>gender</sub>  
b. pl.: \*neuter >> MAX<sub>neuter</sub>, MAX<sub>gender</sub> >> \*feminine

しかし、ここでもやはり、数の有標性と矛盾する部分があり、女性の実現を禁止する制約の順位が単数よりも複数で下がってしまっている。

数の有標性と矛盾することなく (38) の a と b を関連付けるための 1 つの可能性として、MAX<sub>gender</sub> を数の有標性制約と結合することが考えられる。ただ、無制限に結合制約を設定することは不可能なパターンを予測してしまう危険性を増大させることになり、まさにこの場合、単数よりも複数の方が多くの性を区別し得るという誤った予測をしてしまう。しかし、ルーマニア語は、中性を保持しているという点で、ロマンス語として特殊な一面を持っている。もしかしたら、何らかの原因で通常はあり得ない結合制約を獲得することになったのかも知れない。

一方、他のロマンス諸語では全般的に起こった中性の男性への統合が、ルーマニア語では単数においてのみ起こっている。前節で見たように、男性と中性の統合は、数との関連で共時的に起こることはまれであるが、通時的には印欧語においてはよく観察される現象で、男性名詞と中性名詞の形態が類似していることに原因があるらしい (Matasović 2004: 76.)<sup>5)</sup>。そして (27) ~ (31) から分かるように、男性と中性が統合する場合にのみ MAX<sub>feminine</sub> が役割を果たしている。これらのことから、MAX<sub>feminine</sub> は、本来十分下位に位置し眠った状態にあるべきものであったが、男性と中性の形態的類似という外的要因によって活性化し MAX<sub>gender</sub> を下位に追いやったというふうに見えることができる。共時的には、MAX<sub>gender</sub> を MAX<sub>feminine</sub> に置き換える特殊な過程が存在し、その特殊性のために、有標的な数においてよりも無標的な数において容易に実行されると考えられる。現代のルーマニア語では、(38)b のような制約の優先順位があり、特殊な過程が実行されやすい単数においてのみ MAX<sub>gender</sub> が MAX<sub>feminine</sub> に置き換わるのかも知れない。

Jakobson(1971) は、やや異なった視点からこの現象を説明している。すなわち、ルーマニア語の性は、単数においては女性-非女性の、複数においては男性-非男性の対立が成り立っている。単数と男性は使用範囲がより広範で非限定的あるのに対し、複数と女性は

反対に限定的である。限定的範疇が同時に現れるのは避けるべきであるので、非限定的範疇である単数においては限定的範疇である女性を基準にした対立が現れ得るが、限定的な複数においては非限定的範疇である男性を基準とした対立が現れるというものである。

この考え方は、性と数の有標性と合致し、これを最適性理論によって解釈し直すと、以下のようになると思われる。

(39)

- a.  $*[feminine] \& *[masculine] \& *sg, MAX_{[feminine]} \gg MAX_{[masculine]}, *[feminine] \& *sg \gg *[masculine] \& *sg$   
 b.  $*[feminine] \& *[masculine] \& *pl \gg *[feminine] \& *pl \gg MAX_{[feminine]} \gg MAX_{[masculine]} \gg *[masculine] \& *pl$

(40)

a.

$[feminine] \& [masculine]$ ( <i>sg.</i> )	$*[feminine] \& *[masculine] \& *sg$	$MAX_{[feminine]}$	$MAX_{[masculine]}$	$*[feminine] \& *sg$	$*[masculine] \& *sg$
a. $[masculine]$		*!			*
b. $[feminine]$			*	*	
c. $[feminine] \& [masculine]$	*!			*	*

b.

$[feminine] \& [masculine]$ ( <i>pl.</i> )	$*[feminine] \& *[masculine] \& *pl$	$*[feminine] \& *pl$	$MAX_{[feminine]}$	$MAX_{[masculine]}$	$*[masculine] \& *pl$
a. $[masculine]$			*		*
b. $[feminine]$		*!		*	
c. $[feminine] \& [masculine]$	*!	*			*

ここでは、性そのものではなく、性をさらに分解した素性 (feature) の存在の有無が問題となっている。素性は、+か-の値を持ち、[masculine]のみが存在しているときには男性 [+masculine] - 非男性 [-masculine] の対立が、[feminine]のみが存在しているときには女性 [+feminine] - 非女性 [-feminine] の対立が形成されるのである。

Jakobson の考え方は、性そのものの有標性というよりは、性の分布の有標性を問題にしていることで本論とは異なる。このような観点での分析も必要であると思われるが、現時点ではこの節の初めに見たテルグ語に対してはうまく機能しないように思われる。ここでは単数においては男性-非男性の、複数においては中性-非中性の対立が成り立っており、無標的な数に無標的な範疇が、有標的な数に有標的な範疇が現れていることになるのであ

る。

いずれにしても、ルーマニア語の性体系については、さらなる検討が必要である。

## 6. おわりに

本論は、最も馴染みのある男性・女性・中性の3性を基準とした体系についての考察であった。もちろん3つよりも多くの性を区別する言語も多くあり、西アフリカのフラ語では、方言差もあるが、およそ20の性を区別するという(Corbett 1991: 191)。また、3つの性を区別する点で共通している言語でも、5で見たテルグ語などのドラビダ系言語では、性と意味との相関が明瞭であるのに対し、印欧語では、無生物を示す名詞でありながら男性や女性であることはごく普通のことである。意味の基準が不明瞭な場合、各名詞の性が何であるかの判断が難しい場合もあるが、その形態や音形が性の表示になっている場合もある(Corbett 1991: 161ff.)。

このように一口に性といってもさまざまなものがあり、性に関わる現象をすべてその有標性に帰することは到底不可能である。しかし、本論の発端となったドイツ語における形容詞の弱変化語尾“-e/-en”及び指示／関係代名詞の拡張語尾“-en”は、非常に単純かつ形式的でそこに具体的な意味内容は含まれていない。このような事例を見ると、性の有標性もそれなりに役割を果たしていることが明確となる。そして今回、数と性の有標性に基づいて性体系を考察したが、ここで見た性の統合には意味的・形態的要因も当然関わっていると思われる。しかし、少なくとも男性・女性・中性を基本とした体系は、専ら有標性に依拠した分析でも十分に把握可能で、有標性とは本来関わりのない外的要因が制約群の構成に反映されていると思われる場合も見出された。

ところで、本論では男性が最も有標性が低く、無標の性ということになるが、これはデフォルト性(default gender)(Corbett 1999, Matasović 2004: 24)とは異なる。デフォルト性は常に男性であるとは限らず、時間の経過により変遷することもある(Steinmetz 2006)。さらに、いくつかの種類があり、フレーズが名詞化したものの性、異なった性を含んだ名詞句全体の性、あるいは性を導き出す規則が適用できない名詞の性を決定する際になどに役割を果たし、有標性のみでは単純に捉えられない意味的側面からの影響が大きい。性と意味との相関の乏しい印欧語であっても性別のはっきりした人間を表す名詞の多くは中性には分類されないということはでき、このことがデフォルト性の決定に影響を与えていると考えることができるのである(Corbett 1991: 206)。また、Tsimpli & Hulk(2013)は、言語的デフォルト(linguistic default)と学習者デフォルト(learner default)の区別を設け、これらが必ずしも一致しないことを論じている。

以上のように、性に関わる現象には、当然のことながらさまざまな要因が関わっているが、有標性もその要因の1つであるということであり、その役割が明確に現れる事例も存在するのである。<sup>6)</sup>

## 註

- 1) ただし、この変遷は、それぞれの性を特徴付ける名詞語尾の消失によって引き起こされたときれるのが一般的である。
- 2) 意味に基づいて名詞を人間と非人間に区分する性体系が広く観察される (Corbett 1991: 30) ため、北欧語におけるような通性と中性との対立も同様に意味的なもので、(性に関する) 有標性の問題ではないという主張もできるかも知れない。しかし、印欧語においては性と意味との相関が乏しく、通性であっても非人間や無生物を表す名詞は珍しくない。意味だけに基づいて男性と女性が統合するとは考えにくい。
- 3) 行重 (2014: 80 n.14) では、単数で女性であったものが、複数では男性に統合され、さらに中性であったものが複数では女性に移行するという分析を示唆した。実はこれは、Kirchner(1996) の連鎖推移 (chain shift) の分析よりヒントを得たものであったが、今回この考え方は断念した。
- 4) いわゆる連鎖推移的な考え方である。註3) 参照。
- 5) 註1) も参照
- 6) ただし、Corbett(1991: 290ff.) も参照。

## <参考文献>

- Corbett, Greville. 1991. *Gender*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Corbett, Greville. 1999. Default Genders. In Unterbeck, Barbara & Matti Rissanen(eds.): 55-97.
- Fortson, Benjamin W. 2004. *Indo-European Language and Culture: An Introduction*. Oxford: Blackwell.
- Greenberg, Joseph H.(ed.). 1966. *Universals of Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Greenberg, Joseph H. 1966. Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In Greenberg, Joseph H.(ed.): 73-113.
- Jakobson, Roman. 1971. On the Rumanian Neuter. *Selected Writings II: Word and Language*: 187-189. The Hague: Mouton.
- Kager, René. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kirchner, Robert. 1996. Synchronic Chain Shifts in Optimality Theory. *Linguistic Inquiry* 27: 341-350.
- Matasović, Ranko. 2004. *Gender in Indo-European*. Heidelberg: Winter.
- McCarthy, John J. 2008. *Doing Optimality Theory: Applying Theory to Data*. Oxford: Blackwell.
- Rice, Curt. 2006. Optimizing Gender. *Lingua* 116: 1394-1417.
- Smolensky, Paul. 1993. Harmony, Markedness, and Phonological Activity. Handout to talk presented at Rutgers Optimality Workshop 1, 23 October 1993, New Brunswick, NJ. (ROA-87)
- Smolensky, Paul. 1995. On the Internal Structure of the Constraint Component *Con* of UG. Handout to talk presented at University of California, Los Angeles, 7 April 1995. (ROA-86)
- Steinmetz, Donald. 2006. Gender Shifts in Germanic and Slavic: Semantic Motivation for Neuter? *Lingua* 116: 1418-1440.
- Thornton, Anna M. 2009. Constraining Gender Assignment Rules. *Language Sciences* 31: 14-32.

- Tsimplici, Ianthi Maria & Aafke Hulk. 2013. Grammatical Gender and the Notion of Default: Insights from Language Acquisition. *Lingua* 137: 128-144.
- Unterbeck, Barbara & Matti Rissanen(eds.). 1999. *Gender in Grammar and Cognition: I Approaches to Gender, II Manifestations of Gender*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 古賀允洋. 1982. 中高ドイツ語. 東京：大学書林.
- 島岡茂. 1986. ロマンズ語比較文法. 東京：大学書林.
- 行重耕平. 2001. 言語構造における有標性の分布. 島大言語文化 12: 53-74.
- 行重耕平. 2002. ドイツ語における与格－対格の配列について. 島大言語文化 13: 23-39.
- 行重耕平. 2014. ドイツ語における形容詞の弱変化語尾“-e/-en”及び指示／関係代名詞の拡張語尾“-en”について—その意味するもの. 島根大学外国語教育センタージャーナル 9: 67-81.